



Title	『源氏物語』 藤壺の宮の出家
Author(s)	アッタヤ, チョーティカプラカーイ
Citation	詞林. 1999, 26, p. 16-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『源氏物語』 藤壺の宮の出家

チヨーテイカプラカーイ アツタヤ

源氏物語の中で最初に出家する女性には藤壺である。後藤原子氏によれば、「帝妃でありながら異腹の皇子の愛を容れ、秘密の子を帝位に即けつつ、自らは永劫の罪に苦しみ続けるといふ厄介な（藤壺の）設定は、これ以前の日本文学に例をみない」とい¹う。本稿では、藤壺の出家の目的や出家前後のイメージを見、また、彼女の念仏や罪の意識など仏教に対する彼女の信仰心を考察し、他の人物の出家からは見えない彼女の出家の特徴を見ることが出来る。

一 藤壺の呼称

まず、藤壺の出家前の呼称を見る。

① 先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづききこえたまふを、

（桐壺 一一七）

② 「后の宮の姫君こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御容貌人になん」と奏しけるに、

（桐壺 一一八）

③ 名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おほえもとどりなれば、かやく日の宮と聞こゆ。

（桐壺 一二〇）

④ 藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかだたまへり。上のおほづかながり嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかるをりだにと、心もあくがれまどひて、

（若紫 三〇五）

⑤ 「みづからの夢にはあらず、人の御ことを語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな」とのたまひて、心の中には、いかなることならむと思しわたるに、この女宮の御こと聞きたまひて、もしさるやうもや、と思しあはせたまふに、

（若紫 三〇八）

①は藤壺が最初に登場する場面で、「先帝の四の宮」と呼ばれている。②では、「後の宮の姫君」と呼ばれ、藤壺の母が先帝の後であったことを述べている。③では、「かかやく日の宮」と呼ばれ、源氏と並んで帝の寵愛が深いことが分かる。④では、「藤壺の宮」と呼ばれ、彼女の住んでいる所が清涼殿の北にあり、帝の住んでいる所にとっても近いことが分かる。⑤では、藤壺の懷妊を知った源氏が夢占いにより、予言的中するのだからと考えており、ここで藤壺を「女宮」と呼んでいる。藤壺の呼称について、清水好子氏は「藤壺を「おんな」とも「おんなぎみ」とも呼ばなかったのは、光源氏にとって、彼女は理想の恋人だったからである」と述べている。しかし、本文を見ると、藤壺を「おんな」、「おんなぎみ」と呼ぶ場面は確かにないものの、⑤に見えるように「女宮」と呼ぶ場面はある。つまり、藤壺は「おんな」であつても、まだ「宮」のイメージが残り、そのイメージは特別なものとして描かれているのである。

⑥まねぶべきやうなく聞こえつづけたまへど、宮いとこよなくもて離れきこえたまひて、はてはては御胸をいたう悩みたまへば、近うさぶらひつる命婦、弁などぞ、あさましう見たてまつりあつかふ。男は、うしつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先かきくらす心地して、うつし心失せにければ、明けはてにけれど、出でたまはずなりぬ。

(賢木 一〇〇)

⑥は藤壺と源氏の恋の場面である。ここでは、源氏は「男」と呼ばれ、その相手藤壺は「女」として意識されているが、彼女は「女」とは呼ばれず、「宮」と呼ばれている。これに対し、朱雀帝の姫君で、藤壺と同様に「宮」と呼ばれる女三の宮の場合はどうか。

⑦さてもいみじき過ちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれ、と恐ろしくそら恥づかしき心地して、歩きなどもしたまはず。女の御ためはさらにいはず、わが心地にもいとあるまじきことといふ中にも、むくつけくおほゆれば、思ひのままにもえ紛れ歩かず。

(若葉下 一二〇)

⑦は女三の宮と密通した後の柏木が彼女のことを思っている場面である。ここで、彼女は「宮」ではなく、「女」と呼ばれている。つまり、藤壺は、同じ「宮」である女三の宮と比較しても、「宮」の身分を特別に強調されている人物なのだと分かる。

⑧同じ宮と聞こゆる中にも、后腹の皇女、玉光りかかやきて、たぐひなき御おほえにさへものしたまへば、人もいとこに思ひかしづききこえたり。

(紅葉賀 四一九)

⑨中宮は、院の御はての事にうちつづき、御八講のいそぎを、さまざまに心づかひせさせたまひけり。

⑧では、藤壺を「后腹の皇女」と呼び、藤壺の母は先帝の

(賢木 一二〇)

后であったことを強調し、他の宮たちと違って輝いていることを述べている。⑨では、藤壺は「中宮」と呼ばれる。藤壺は中宮になる前に、「女御」とは一度も呼ばれていない。今西祐一郎氏は、「後宮において女御の称が用いられるようになった桓武朝以降、『源氏物語』の時代に至るまで、内親王でその称を受けた者は一人もいなかったといつてほぼ誤りはないであろう。そしてこの事実が、『先帝の四の宮』という身分をもつて入内した『源氏物語』の藤壺を「藤壺女御」と呼ぶことに対する大きな妨げとなるはずである」と述べている。³しかし、藤壺を「女御」と呼ばないのは、そのような歴史的事実にのみ依つた結果であろうか。藤壺が「女御」とは一度も呼ばれないことは、入内した他の女性とは違う藤壺の高貴なイメージを作り上げていく一つの手段ではなかったか。つまり、藤壺は、内親王という高い身分を殊更に強調されている人物なのである。

では、藤壺の出家後の呼称はどのようなものだろうか。

⑩入道の宮よりも、ものの聞こえやまたいかがとりなされむと、わが御ためつつましかれど、忍びつつ御とぶらひ常にあり。
(須磨 一五五)

⑪いとまばゆきまで光りあひたまへるを、世人めでたきものに聞こゆれど、母宮、いみじうかたはらいいたきことに、あひなく御心を尽くしたまふ。内裏にもめでたしと見たてまつりたまひて、世の中譲りきこえたまふべきことな

ど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。同じ月の二十余日、御国譲りのことにはかなれば、大后思しあわてたり。

(落標 二七二)

⑫中宮も参らせたまへるころにて、かたがた御覧じ棄てがたく思はずことなれば、御行ひも怠りつつ御覧ず。この人々のとりどりに論ずるを聞こしめして、左右と方分かたせたまふ。
(絵合 三七〇)

⑬入道後の宮、春のはじめより悩みわたらせたまひて、三月には、いと重くならせたまひぬれば、行幸などあり。

(薄雲 四三三)

⑭では、初めて藤壺を「入道の宮」と呼ぶ。出家後の藤壺は「入道の宮」とよく呼ばれるが、冷泉帝が即位する時には、⑪に見えるように、「母宮」と呼ばれている。また、⑫は絵合の日だが、ここでは、藤壺は出家前のようにまた「中宮」と呼ばれている。後藤祥子氏によると、「后位は本来、出家によって返上すべきものでも剥奪されるものでもない筈なのだった。入道の宮でありながら中宮であることは充分あり得るのである」という⁴。また、「入道の宮」と呼ぶことは齋宮を応援する現世的な役割にふさわしくないもので、ここで藤壺を「中宮」と呼んでいるのだとも考えられる。⑬は藤壺が重病の時に、ここでは彼女を「入道後の宮」と呼んでいる。これらの文に見えるように、藤壺は出家しても、「母」のイメージや「中宮」、「后」のイメージを保ち続ける。彼女は出家後もまだ

世俗的な役割を持っていますのである。

また、入道の宮の身で死んでしまったのに、死後の彼女は「入道の宮」とはあまり呼ばれない。

⑭これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましにし院後の宮、ただ今世をまつりごちたまふ大臣の御ため、すべてかへりてよからぬことにや漏り出ではべらむ。
(薄雲 四四〇)

⑮わが君生まれおはしましたりし時より、故宮の深く思し嘆くことありて、御祈禱仕うまつらせたまふゆゑなむはべりし。
(薄雲 四四二)

⑯ひと年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたる事なれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。
(朝顔 四八二)

死後の藤壺の呼称は、⑭⑮⑯からわかるように、「後の宮」、「故宮」、「中宮」などである。死後、彼女はそれらの呼称で何回も呼ばれているが、「入道の宮」と呼ばれるのは三回だけである。このように、彼女は脱俗のイメージより世俗的なイメージの方が強いのである。

世俗的なイメージは、次に挙げた藤壺の出家に対する言葉にも見られる。

⑰世のうとましく過ぐしがたう思さるれば、背きなむことを思しとるに、
(賢木 一〇六)

⑱最終の日、わが御ことを結願にて、世を背きたまふよし

仏に申させたまふに、みな人々驚きたまひぬ。

⑲今はと世を背くほどは、あやしうあはれなるわざを、まして、かねての御気色にも出だしたまはざりつることなれば、親王もいみじう泣きたまふ。
(賢木 二二三)

⑰は藤壺が出家を決意する時で、⑱⑲は藤壺の出家日の場面である。これから、藤壺は、全ての場面で「背く」という言葉を使って、自分の出家を述べていることが分かる。女三の宮の場合と比べてみると、女三の宮は「背く」という言葉の他に、⑳に見えるように、「尼になる」という言葉も使っている。

㉑え生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり。尼になりて、もしそれにや生きたまると試み、

女三の宮に限らず、他の女人の場合には「尼になる」という言葉が使われたり、出家後も「尼」や「尼君」と呼ばれたりしているが、藤壺の場合には「尼」とは呼ばれないし、「尼になる」という言葉も使われない。藤壺の尼姿について、小林美和子氏は「髪の水に關して言へば、藤壺の場合、その尼姿に触れた表現には、出家場面のみならず、これ以後も出会わない。逆に、具体的な尼姿に触れない点が、藤壺の場合の特徴とも言えなくはない」と述べている。藤壺は他の女性に比べ、「尼」の印象が弱いようなのである。

以上、藤壺の呼称を探ってきた。藤壺は出家前、「宮」の身分やイメージが特別に強調され、「女」や「女御」とは呼ばれない。また、出家して「入道の宮」になっても、まだ世俗的な役割を持つており、「中宮」などと呼ばれ、「尼」とは呼ばれない。さらに、「入道の宮」の身で死んだのに、死後の彼女は「入道の宮」とはあまり呼ばれない。藤壺は出家しても、「入道の宮」としてのイメージが弱く、俗人のように描かれているのである。それならば、彼女は何のために出家したのだろうか。

二 出家と念仏

桐壺院の一周忌の後、藤壺は出家してしまった。しかし、彼女は桐壺院のために出家したのではない。

①宮も、春宮の御ためを思すには、「御心おきたまはむ」といとはしく、世をあぢきなきものに思ひなりたまはば、ひたみちに思し立つこともや」と、さすがに苦しう思さるべし。「かかること絶えずは、いとどしき世に、うき名さへ漏り出でなむ。大后のあるまじきことにのたまふなる位をも去りなん」と、やうやう思しなる。院の思しのたまはせしさまのなめならざりしを思し出づるにも、「よろづのこと、ありしにもあらず変りゆく世にこそあめれ。戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、必ず

人笑へなる事ありぬべき身にこそあめれ」など、世のうとましく過ぐしがたう思さるれば、背きなむことを思しとるに、

(賢木 一〇五)

これは藤壺の出家の決意の場面である。藤壺はまず春宮のことを考え、「御心おきたまはむ」といとはしく、世をあぢきなきものに思ひなりたまはば、ひたみちに思し立つこともや」とあるように、源氏が出家してしまつたら、春宮の後見がなくなつてしまふことを恐れている。藤壺が先に出家したら、源氏は母がいない春宮を自らも出家して棄ててしまふことができず、春宮の後見役をしなければならぬのだ。また、「かかること絶えずは、いとどしき世に、うき名さへ漏り出でなむ」とあるように、藤壺は自分に源氏が接近しつづけることで、密通のことが漏れ出ることを恐れている。藤壺が出家したら、源氏は藤壺の身に近づけないのである。次に、「大后のあるまじきことにのたまふなる位をも去りなん」とあるように、藤壺は大后の恨みを恐れている。藤壺が大后を越えて中宮になつたことを、大后は今も恨み続けている。今、朱雀院が即位し、大后の政治権力が強まっているので、藤壺はその危険を恐れている。大后の恨みを弱くするために、出家するのである。このように、彼女は子供と自分を守るために、出家を決意するのだと分かる。また、傍線部の最後の部分を見ると、彼女は世間がうとましく、過ぐしがたいと思つて出家するのだということがわかる。ここには、彼女の厭世的な

思いが見られる。以上のように、藤壺の出家の目的は春宮のためと、自分を守るためであり、また、厭世観によって、出家を決意したことがわかる。つまり、彼女の出家は保身的、厭世的なのだ。一方、道徳的な思いはこの場面からは見られない。藤壺は出家を決意する時に密通の罪を消したいという気持ちや、信仰心などは持っていない。彼女は仏に仕えるために出家したのではないのである。

では、出家後、藤壺は何のために念仏するのだろうか。

②年もかはりぬれば、内裏わたりはなやかに、内宴踏歌など聞きたまふも、もののみあはれにて、御行ひしめやかにしたまひつつ、後の世のことをのみ思ひに、頼もしく、むつかしかりしこと離れて思はざる。常の御念誦堂をばさるものにて、ことに建てられたる御堂の西の対の南にあたりて、少し離れたるに渡らせたまひて、とりわきたる御行ひせさせたまふ。
(賢木 一二七)

③わが身をなきになしても春宮の御世をたひらかにおはしまさばとのみ思ひつつ、御行ひたゆみなく勤めさせたまふ。人知れずあやふくゆゆしう思ひ聞こえさせたまふことしあれば、我にその罪を軽めてゆるしたまへと、仏を念じきこえたまふに、よろづを慰めたまふ。
(賢木 一二〇)

②では、出家後の藤壺は「後の世のこと」をのみ思って念仏していると述べられる。諸注釈には、「後の世のこと」とい

うのは来世の極楽往生を意味するとある。そうだとしたら、藤壺の念仏の目的は自分の往生のためのみだということになる。しかし、③では、「わが身をなきになしても春宮の御世をたひらかにおはしまさばとのみ思ひつつ」とあるように、藤壺は春宮の即位のみを思って念仏している。つまり、②と③では藤壺の念仏の目的が異なっていることになる。この矛盾はどのように解釈すればよいのだろうか。

明石入道の念仏を見てみよう。

④この浦に住みはじめしほどの心づかひ、後の世を勤むるさまかきくづし聞こえて、このむすめのありさま、問はず語りに聞こゆ。
(明石 一三三四)

⑤住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童のいときなうはべりしより、思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとに必ずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意かなへたまへとなん念じはべる。
(明石 一三三四)

⑥若君は、春宮に参りたまひて、男宮生まれたまへるよしをなむ、深くよろこび申しはべる。そのゆゑは、みづからかくつたなき山伏の身に、今さらにこの世の榮えを思ふにもはべらず、過ぎにし方の年ごろ、心ぎたなく、六時の勤めにも、ただ御ことを心にかけて、蓮の上の露の願ひをばさしおきてなむ、念じたまつりし。

④から、明石入道は「後の世」のために念仏していると分かる。しかし、ここの「後の世」とは彼の来世の往生を意味するのだろうか。⑤と⑥を見てみると、彼の勤行においては、自身の極楽往生の願いは二の次であり、娘の将来のことが第一であることがわかる。つまり、彼は自身の往生のためより子供のために念仏するのである。だとすれば、④の「後の世」とは彼の往生を意味するというより子供の将来のことを意味するのではないだろうか。例えば、次のような例もある。

⑦「はかばかしき方にはぬるくはべる家の風の、さしも吹き伝へはべらん、後の世のためことなることなくこそはべりぬべけれ」と申したまへば、（若菜上 一三六）
⑦は柏木の言葉であり、蹴鞠のような遊戯の相伝では甲斐がない、と謙遜する内容であるが、ここの「後の世」は明らかに子孫のことを意味しているのだ。

「後の世のこと」が子供の将来のことを意味するならば、藤壺の念仏の目的の問題は解決する。②の文は彼女が春宮の将来のためにのみ念仏するという意味になり、「春宮の即位のためのみ」という③の内容と矛盾しない。このように、藤壺の念仏は来世の往生のためより春宮のためだと考えられる。すなわち、藤壺の念仏は現世利益のためなのである。

ところで、春宮がその後、無事に即位できるのは藤壺の念仏のおかげなのだろうか。念仏に仏への信仰心はもつとも重

要なものである。けれども、藤壺は厚い信仰心を持っているのだろうか。本文を見ると、彼女の仏への信仰心はどこにも描かれていない。出家を決意する時にも彼女の信仰心は見られない。また、③の最後の文に「よろづを慰めたまふ」とあるように、藤壺は念仏によって自分を慰めていると見られる。彼女は春宮のことを心配し、不安な思いを持っているから、心の慰めの方法として念仏するのである。仏の力を強く信じたから、春宮のことを祈るのではなく、ただ慰めの方法として念仏するのである。明石入道の場合と比べると、⑤から見えるように、源氏と出会う前に、明石入道は十八年間ずっと念仏し、また、⑥に見えるように、彼は自分の念仏のおかげで子供のことがかなったのだと述べている。一方、藤壺は子供のことがかなった時、それは念仏のおかげだとは述べない。仏の力を強く信じた明石入道は願いがかなうまで何十年も念仏しなければならぬのに対し、一方、仏への信心があまり見えない藤壺の場合はただ五年間ぐらいの念仏で願いがかなうのだろうか。源氏の夢占いによって冷泉が帝になることはすでに予言されており、彼の即位は藤壺の念仏のおかげではなく、彼自身の運命がそうだったからだということではないだろうか。

藤壺は春宮の将来を仏に託すのではなく、源氏に託すのである。出家の決意の場面から見えるように、藤壺は源氏が出家することを恐れている。彼女は春宮のことを源氏にまかせ

ているので、源氏の出家によつて、春宮の後見がなくなつてしまふことを心配しているのだ。

⑧おほかたのことども、宮の御ことにふれたることなどをば、うち頼めるさまに、すくよかなる御返りばかり聞こえたまへるを、さも心かしこく、尽きせずも、と恨めしうは見たまへど、何ごとも後見きこえならひたまひにたれば、人あやしと見とがめもこそそれと思して、

(賢木 一一五)

⑨見しはなくあるは悲しき世のはてを背ししかひもなくなくぞ経る

(須磨 一七二)

⑧からわかるように、出家した藤壺は春宮関係の用事にかぎつて、源氏と連帯する。せつかく源氏から逃げるために出家したのに、出家後の彼女がまだ源氏との関係を断ち切れな^いのは、彼女が春宮のことを源氏に託しているからなのである。源氏を頼りにしているから、彼と連絡しないわけにはい^かないのだ。また、⑨では、藤壺は頼りとした桐壺院が亡くなり、生きている源氏も須磨に退き、出家の甲斐もなく、泣く泣く日を送っていると云つてゐる。藤壺は源氏が春宮の後見をしてくれることを望み、また、彼が出家してしまうことを恐れるあまり、自分が先に出家してしまつたのだが、今頼りにする源氏が須磨に退いてしまひ、春宮の後見がなくなつたので、出家の甲斐がないと言つてゐるのである。彼女は出家を後悔しているとも言えるだろう。

⑩かくても、いつしかと、御位を去り御封などのとまるべきにもあらぬを、ことつけて変ること多かり。みなかねて思し棄ててし世なれど、宮人どもも拠りどころなげに悲しと思へる気色どもにつけてぞ、御心動くをりをりあれど、

(賢木 二二九)

⑩は藤壺が出家を後悔する場面である。出家した後、女房たちが頼りなさそうにして悲しんでいるのを見、藤壺の心は動揺している。日本古典文学全集の頭注には、ここでの藤壺は「出家に対して後悔の心を抱く」とある。藤壺は出家後、子供のことや源氏との関係など世俗のことが断ち切れず、また、出家を後悔する思いも持つてゐるため、出家の身であっても、世を棄てきれない。

⑪宮いと苦しうて、はかばかしうものも聞こえさせたまはず。御心の中に思しつづくるに、高き宿世、世の榮えも並ぶ人なく、心の中に飽かず思ふことも人にまさりける身、と思し知らる。

(薄雲 四三五)

⑪に見えるように、藤壺は自分が「高き宿世」だと思つてゐる。彼女の死を前にしたこのような思いは⑫の晩年の源氏の思いとかなり似通つてゐる。

⑫この世につけては、飽かず思ふべきことをささあるまじう、高き身には生まれながら、また人よりことに口惜しき契りにもありけるかな、と思ふこと絶えず。世のはかなくうきを知らずべく、仏などのおきてたまへる身な

るべし。

(幻 五一)

「飽かず思ふべきこと」、「高き身」、「人よりことに口惜しき契り」という源氏の思ひは死を前にした藤壺の思ひと符合している。けれども、藤壺は源氏の「世のはかなくうきを知らすべく、仏などのおきてたまへる身なるべし」というような思ひを持っていない。彼女は源氏とは違い、仏が人生のはかなさを悟らせようとし、わざと悲しいことをさせたとは思っていない。悲しいことがあつても、それは前世の因縁、自分の宿世のせいだとばかり思っているようなのである。

このように、藤壺には信仰心が見られない。また、彼女の念仏も来世の往生のためではなく、現世利益のためだから、彼女はこの世への執着心が強い世人たちとかわりないのだと見られる。

三 死後の藤壺

① 燈火などの消え入るやうにてはたまひぬれば、いふかひなく悲しきことを思ひ嘆く。(薄雲 四三七)

①では、藤壺の死を「燈火などの消え入るやうにてはたまふ」と描写する。この藤壺の死について、藤本勝義氏は「釈迦入滅に準えるかのような方法と相俟つて、藤壺を仏に重ねるほど称える高德崇高さを強調するものであった。あらゆる階層の者からみて理想的な女院であつたといえよう」と述べ

ている。また、石田穰二氏は「作者は、高位にあつて仁慈、公人として身を持つること正しかつたこの人の死を莊嚴しようとして、「ともしびなどの消え入るやうにて」と書いたのである」と述べている。①では、彼女の死が釈迦の死にも準えられるように描写されるから、彼女の極楽往生は保証されるようだ。しかし、彼女は結局成仏しなかった。

② いみじく恨みたまへる御氣色にて、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。(朝顔 四八五)

②では、源氏の夢に現れる藤壺はたいそう恨む様子で、うき名が世に現れることを恥じ苦しみ、恨めしく思っている。源氏が密通のことを紫の上に語ったから恨んでいるのである。ここから、藤壺は死後も密通の罪に苦しみつづけていることが分かる。

藤壺が密事が漏れ出るのを恐れる様子は本文によく語られる。

③ 世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても(若紫 三〇六)

④ 「：必ず人笑へなる事ありぬべき身にこそあめれ」など、世のうとましく過ぐしがたう思さるれば、背きなむことを思しとるに、(賢木 一〇六)

⑤ あはれをも多う御覧じすぐし、すくすくしうもてなした

まひしを、かばかりうき世の人言なれど、かけてもこの方には言ひ出づることなくてやみぬるばかりの人の御おもむけも、あながちなりし心の引く方にまかせず、かつはめやすくもて隠しつるぞかし。

(須磨 一八三)

③では、藤壺は世の笑いのものになることを恐れ、源氏のうに夢の世界だけを思うことはできないと述べている。④は出家を決意する時であり、ここでも藤壺は人のもの笑いになることを恐れている。⑤では、藤壺は源氏が密通のことをうまく隠していることをありがたく思っている。これらの文から、藤壺は密事が世間に漏れてしまうのを恐れているとはつきりわかる。

⑥上の、夢の中にも、かかることの心を知らせたまはぬを、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて、これのみぞ、うしろめたくむすばはれたることに思しおかるべき心地したまひける。

(薄雲 四三五)

⑦「さらに。かけても聞こしめさむことをいみじきことに思しめして、かつは、罪得ることにやと、上の御ためをなほ思しめし嘆きたりし」と聞こゆるにも、

(薄雲 四四七)

⑥において、死を前にした藤壺は冷泉帝が実の父は源氏であることを知らないことを心配している。けれども、彼女は結局冷泉帝にその秘密を語らなかつた。⑦は王命婦の言葉である。ここから、藤壺は冷泉帝が密事を知るところをひどくい

やがつていたことが分かる。このように、もし藤壺が死ななければ、冷泉帝はその秘密を知ることができない。冷泉帝が実の父を源氏と知るとは源氏を臣下のままにしておくことができないことを意味する。これについて、藤本勝義氏は「源氏の限らない栄華獲得のためにも、帝に真相を知らせる必要はあつた」と述べている。藤壺が生きているかぎり、冷泉帝が秘密を知ることができないから、彼女は死ななければならなかつたのだと考えられる。

藤壺の他に、源氏がその人のことを語つたあとで、すぐに死霊となつて現れた人に六条御息所がいる。

⑧中宮の御ことにても、いとうれしくかたじけなしとなん、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおほえぬにやあらむ、なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまるものなりける。その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず増かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いとうらめしく。今はただ亡きに思しゆるして、他人の言ひおとしめむをだに省き隠したまへ、とこそ思へ、とうち思ひしばかりに、かくいみじき身のけはひなれば、かくところせきなり。

(若葉下 一二七)

⑧では、源氏が紫の上を相手に六条御息所のことを語つた後、六条の死霊が現れ、源氏を恨んでいる。ここで、彼女の

気持ちは「つらし」と表現されるが、源氏の夢に現れた藤壺の気持ちも六条と同様に「つらし」である。彼女たちは出家後も死後もまだ源氏を恨めしく思いつづけており、自分の執着心を消さなかったから、極楽往生できないのだと考えられる。六条の死霊の言葉を見ると、彼女は源氏を恨んでいるが、子供の秋好中宮のことについては源氏をありがたく思っている。一方、死後の藤壺の方を見ると、彼女は子供のことを言わず、源氏を恨んでいるばかりである。六条の死霊の言葉の「道異になりぬれば、子の上までも深くおほえぬにやあらん」によれば、生死の道を異にしてしまうと、子のことまでは深く感じないということになる。藤壺の場合もそうではないだろうか。母性が強い彼女でも、死後、皇子の母として生きる強さがなくなってしまった。しかし、女としての情念はなくならなかったから、死後は源氏の夢に現れ、彼を恨んでいるのである。

次に、死後の藤壺が源氏の夢に出る夜の風景を見る。

⑨雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮れに、(中略)「冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしてみても、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじき例に言ひおきけむ人の心浅さよ」とて、御簾捲き上げさせたまふ。月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡された

るに、しをれたる前栽のかけ心苦しう、遺水もいいたうむせびて、
(朝顔 四八〇)

「冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる」、また、「月は隈なくさし出でて」という描写から、冬の夜の月の冷艶な美しさが見られる。この源氏の言葉を見ると、この風景では来世のことにまでも思いをはずすにはいられないから、見た目の美しさもしみじみと感じられるということになる。「この世の外のこと」とは具体的には何であろうか。

⑩やうやう人静まりて、女房ども、鼻うちかみつ、所どころに群れるたり、月は隈なきに、雪の光りあひたる庭のありさまも、昔の事思ひやらるるに、いとたへがたう思さるれど、いとう思ししづめて、(中略)

「月のすむ雲」をかけてしたふともこのよのやみに
なほやまどはむ

と思ひたまへらるこそ、かひなく。…(中略)

「おほかたのうきにつけてはいとへどもいつかこの世を背きはつべき

かつ濁りつつ」など、かたへは御使の心しらひなるべし。

(賢木 二二四)

⑩は藤壺の出家日の夜である。この夜の風景は⑨の夜と極めて類似している。このような月の夜に、源氏は出家した藤壺の心を「月のすむ雲」と言った。⑨で源氏が紫の上に藤壺のことを語るのは、その夜の風景が藤壺の出家日の夜と酷

似していたからであり、そのような月を見ると、藤壺のことをなつかしく思い出さずにはいられなかったからである。⑨の源氏の言葉の「この世の外のこと」とは死んだ藤壺のことを示しているのだと思われる。⑩で藤壺が「おほかたのうきにつけてはいとへどもいつかこの世を背きはつべき」と歌に詠んだように、出家した彼女はまだ世が棄てきれいていない。つまり、冬の夜の月はまだ世が断ち切れない彼女の心を象徴しているのだらうと思われる。そして、死後の彼女が源氏の夢に現れる夜の月が、彼女の出家日の夜と同じ月であることは、死後の彼女の心も出家した時と同じくまだ世が棄てきれないまだということを示しているのだらう。藤壺は出家しても、結局まだ執着心を持っているので、死後は成仏できないのだと考えられる。

以上、藤壺の呼称や念仏の目的などを見、彼女の出家について考察してきた。藤壺は子供と自分を守るために出家し、出家後も源氏と力を合わせて子供の後見をし、念仏や勤行をしても、それは極楽往生のためではなく、子供の春宮の即位のため、つまり、現世利益のためであった。『源氏物語』の中で最初に出家する人物は藤壺である。けれども、彼女は出家しても、まだ子供のことが棄てきれず、源氏との密通のこととも思いつづけ、最後まで世俗のことが断ち切れない。彼女は「入道の宮」であつても、入道の宮の資格やイメージが乏し

い人物なのである。

注

- (1) 後藤祥子「藤壺の宮の造型」(森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社・平5)
- (2) 清水好子「藤壺宮」(源氏の女君 増補版 塙新書・昭42)
- (3) 今西祐一郎「かかやく日の宮」考」(『文学』昭57・7)
- (4) 前掲注(1)
- (5) 小林美和子「源氏物語の出家描写」(『王朝の表現と文化―源氏物語・枕草子を軸として』笠間書院・平11)
- (6) 日本古典文学全集『源氏物語2』一三〇頁
- (7) 藤本勝義「源氏物語『薄雲』巻論―榮華と悲傷の構造」(『源氏物語の探究』第十輯、風間書院・昭60)
- (8) 石田稔「『源氏物語』における四つの死―歌語のことなど」(『源氏物語論集』桜楓社・昭46)
- (9) 前掲注(7)

※本文の引用は、日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)によった。

(Chotikapakai Ataya / aratan Terahisumu)

本学大学院博士後期課程)